

# 森恒夫について改めて思うこと

西浦 隆男  
Nishiura Takao

二〇〇八年四月一五日～三〇日に記す  
はじめに

若松孝二の『実録・連合赤軍あさま山荘への道程』を見て、森恒夫に対して怒りを覚えなかつた人はいなかつたのではない。あまりにもおぞましい仲間殺しのシーンを見れば誰もそう思うのではないか。自身、森恒夫とは大阪市立大学の学生時代から赤軍派にいたるまで長く接していたような人間ですら、三六年の歳月を経てさえ憤激を覚えざるを得ない。遠山さんや行方君もよく知つていただけにあのシーンのおぞましさは今も脳裏から消えない。

連赤の後、私自身も七二年一月に逮捕され、その後約一年間、森恒夫と同じ東京拘置所にいた。森恒夫が七三年一月一日に東京拘置所で自死したとき、私も同じ東拘にいた。その時のショックも又のみがえつてくる。

以来、三六年たつた今まで、連赤については、消え去ることのできないおりのように胸の中に残つてはいたが、長い間正面から

向き合うことはどちらかといえば避けてきたような感がある。

連赤関係の本も何冊かは買つてはいたが、ざつと目を通しただけでほとんど読まないままできた。映画を見てから、改めてこれらの本を引っ張り出し、読んでいる。本から目をそむけたくなるような思いを何度も押さえつけながら。

これから書くことは、学生時代からともに活動してきた森恒夫の記憶を思い起こす作業とこれら資料から見つめなおした連赤とそこでの森恒夫に対する私個人の意見である。

今頃そんな昔のことをはじくりかえすことに何の意味があるのか、そもそも言う資格があるのかという批判もあるだろう。これらの批判は甘んじて受ける。ただ、あの記憶を風化させてはならないという思いがこの雑文を書くように駆り立てたとだけ言つておこう。

※なお、失礼とは思うが、文中、基本的に敬称は省略させていただいた。

## 一 森恒夫と学生運動

ブンドの四分五裂の状況に比較的影響される事なく関西ブンドの勢力が維持され、大管法闘争等で全国的な闘争を牽引するような状況があつた。

私が社学同に参加した頃、彼は大学にあまりいなかつたようだと思ふ。ひとつは生協（組織部）の活動をやつていたこと、後には生協労組を作り、組合運動もやり、反戦青年委員会のデモに連れて行つたりしていた。生協の組織部という経営側でありながら、労働組合もやるという彼の活動スタイルは、単なる学生運動の活動家という概念では收まりきれない幅の広さを持つていたようだと思う。彼の生協時代を知っている人も彼のことを評価していたと思う。

六七年の一〇・八羽田闘争に始まる激動の時期、一一・一二第二次羽田闘争、三里塚、王子等と現地闘争には私もほとんど森恒夫と行動を共にしたようだ。佐世保にも行つてゐると思うが、私は行つていないのでその時のことはわからぬ。ただ、市民の強い共感をよんだ戦いだつたことを何度も聞かされたようだ。

生協（組織部）と労働組合の活動をやりながら、田宮高鷹が卒業して東京に上京した後の市大の学生運動を実質的に指導していたのは森恒夫だつた。私も、森恒夫から後継者としての指導を受けた。市大では、次の世代への指導のバトンタッチを行なうため、後継者となる候補の学生活動家を、一緒に下宿に住むことも含めて、生活もともにしながらの指導を行なつてゐたのである。私は、当時、市大の杉本町キャンパスの中にある杉本寮に入つていたため、一緒に住み込んで活動することはなかつたが、私の次

関西では、森恒夫と一緒に活動した人間が多くいるので、彼の墓（森家の御墓だとわれわれは思つてゐるが）に何年か前までは墓参りをしてゐた。今はその墓地 자체がどこかに移転してしまつて、行方がわからぬ状態になつてゐる。関西では、彼と一緒に活動した昔の活動家（たいていは森恒夫より下の世代）で、森恒夫のことをおもに悪く言ふ人はいないと思う。多くの人が「彼は人格者だつた」といい、その人柄を慕つてゐる。私も同じ思いなのだが、そのような彼と、連赤の彼との落差はあまりにも大きすぎて、いまだに不可解な思いを抱いてゐることも事実である。

森恒夫は、六八年に大阪から田宮高鷹らの後を追つて上京し、ブンドの千葉県委員会を作つて活動してゐた。当然、彼も三里塚の現闘につめていた。私達関西の学生部隊が三里塚闘争に参加したときなどは、森恒夫が現地の責任者として指揮にあつてゐたので、三里塚でも何度か行動を共にしている。その時に、森恒夫が三里塚の人々に、非常に暖かく親愛感をもたれていたことが印象に残つてゐる。現地闘争で機動隊につかまつてボコボコにされたよと現地の人と笑つてゐたことが今も記憶に残つてゐる。連赤の事件で森恒夫のことが報じられたときも、彼を知つてゐた三里塚の人は事件を信じなかつたという報道を読んだ記憶がある。彼の大学時代はどうだつたろうか？私が覚えてゐるのは、非常に有能なオルガナイザーとしての森恒夫である。彼は私より二年上だから、確か六三年入学だつたと思う。私が大阪市大に入学した六五年は日韓闘争の年であり、六〇年安保敗北後の沈滯状況から脱し始めていた時期である。関西では、六〇年安保闘争敗北と

の世代は、森恒夫と同居して指導を受けていた。その頃は、私もその指導・教育に森恒夫のいた下宿に時たま顔を出していた。主に理論学習や、実際の活動スタイルなどの連成教育という感があつたが、こういうスタイル（起居を共にするという）の指導を森恒夫は得意としていたようと思つ。森恒夫は、塩見・田宮・高原らがいなくなつて後に不在となつた赤軍派の指導部を実質的に握ることになり、中央軍を統括する位置に立つが、このとき、彼のことを「おやじさん」と呼んでいたと多くのメンバーが言つてゐる。起居を共にしながら指導するということで信頼をかちとるというスタイルはこのときも貫かれたと思う。（後に、中央軍のメンバーがM作戦等で逮捕されたりしても、軍からの脱落者自身はほとんどいなかつたことは、彼の実務的な統率力がすぐれていたことを示すものではないかと思われる。ただ、一面では、家父長主義的な傾向があつたことも留意しておく必要がある。ただ、大菩薩以降と思われるが、塩見・田宮健在な頃から、塩見を社長、田宮を組長などと呼んでいたので、赤軍派内に一種家父長主義的な雰囲気があつたことも事実である。）

又、オルガナイザーという意味では、生協以外にも、各大学（桃山学院、大阪商大、関大など）にオルグによく行つていたし、高校生のオルグもよくやっていた。大阪府高連という組織のメンバーの多くは彼の影響下にあつたのではないか？ この時期に森恒夫にオルグされた活動家は、森さん、森さんといつて慕つていたし、一緒に千葉県委員会に参加したものもいる。

森恒夫は市大の学生運動の中では、生協運動をしていたという

／六事件の際、塩見氏らと拉致されて、逃亡しようとして、転落して重傷を負い、意識が戻らぬまま死亡したことを獄中で知り、大きなショックを受けた。

一月五日、大菩薩峠で赤軍派五〇数名が逮捕されたが、「武装蜂起」（首相官邸襲撃）のための軍事訓練のために集結していたと知るのは、獄中から出でからのことである。

ともあれ、六九年の一月末に保釈で東京拘置所を出所した私は、翌年（七〇年）の正月明けに大阪に戻るが、その時は市大の封鎖は解除され、活動家もバラバラになつていていた。市大から赤軍派に参加したのは、田宮以外では、東大闘争で逮捕され保釈されてでてきた赤木志郎だけだったと思う（後によど号HJに参加。現在ビヨンヤンに在留）。

この中で私は、なによりもまず森恒夫の消息を探した。獄中にいた時に、田宮から赤軍派に勧説する手紙がきていたし、出所してからも赤軍派との接触はあつたが、森恒夫が赤軍派にはいないということを聞いて、探そうと思ったのである。森恒夫の意見が聞きたかつた。どのようなきさつで森恒夫と連絡が取れたのかは覚えていないが、とにかく連絡がとれて彼と会うことができた。彼は七／六の前に姿を消し、東大阪で旋盤工をして働いていた。会つたとき、森恒夫は、七／六事件をかなり厳しく批判していたという記憶がある。つい最近まで私は、森恒夫が七／六事件（のような分派闘争のやり方）を批判して離脱したのだと思つていた。詳しいきさつまでは彼は語らなかつたからである。

最近聞いた話によると、七／六の前に、彼はブンドの東京の集

こともあるつて、あまり表には出ず、オルグなどの裏方に徹しているよう思う。大衆集会などではめつたにアジテーションしないが、活動家の会議などでは、指導的な役割を担つていて、六七年一〇・八羽田闘争のあと、沈滞していた学生運動は高揚にむかいつつあつた。六八年の六月二八日に大阪御堂筋でデモが行なわれたが、この時、関西で初めてゲバ棒闘争が戦われた。この時、同志社など京都の学生数百人も市大に集まり、市大でゲバ棒で「武装」して出撃した。

このゲバ棒の搬入などを京都と連絡をとつて指揮したのは森恒夫だつた。このデモの後に、森恒夫はブンドの千葉県委員会の活動を行なうために上京したのではなかつたかと思う。

## 二 森恒夫と七／六事件

森恒夫は、六八年後半に田宮高麿たちが上京して行つた後を追うように千葉に活動の本拠を移した。

当時、ブンドの中で、塩見、田宮、U、D氏らが東京・神奈川、千葉など関東に勢力を広げるべく出て行つたのである。六九年の安保決戦を意識して、ブンドの党内論争は活発化し、党内の分派闘争が次第に拡大しかけていた。

私は六九年三月に東大安田講堂の件で事後逮捕され、六九年一二月末に保釈で出でくるまでの間、獄中にあつた。その間、獄外では七／六事件・ブンドの分裂があり、赤軍派が結成された。関西の学生運動で共に活動していた同志社の望月上史が、七

た多くの活動家や関西での支持基盤も狹めてしまったと思う。後に赤軍派となるフラクションが、一時的な憤激に流され、冷静に組織だった対応をしておれば、党内闘争は異なった展開をみせた可能性はあるたし、そうなれば、六九年の闘争の様相も相当変わつたものになつていたかも知れないと思う。決定的なことは、六〇年安保以降の地道な活動により培つてきた、関西での労働運動など広範な支持基盤から完全に切り離されてしまったことではないかと思う。このため赤軍派は、ほとんど学生活動家だけの組織に戻つてしまい、それは急進主義的な圧力となつて、ひたすら突っ走つて行くという方向にゆく。

だから、七／六事件というのは、思つてはいる以上に大きな意味を持つていると私は思う。

映画の中で、森恒夫が七／六の場で逃走したように描かれていたのは、事実とはかなり異なるのではないかと思う。多くの人が、森恒夫が七／六事件前後にフラクションから姿を消したことと連赤での森恒夫の行動に影響を及ぼした（もはや逃げることができないという）のではないかと言つてはいる。ただ、彼は、七／六事件での赤軍派（のやり方）は間違つていたとはつきり言つた。暴力的にやつたからダメなのか、結果的に仮議長を敵の手中にしてしまつたことがまちがつていたのか、それとも計画的でなかつたからダメだ（はめられた？）というのか、路線が誤つていたというのか、このあたりははつきり言つて分からない。

一般的に言えば、関西でも市大でも、暴力的な党派闘争や派閥争、いわゆる内ゲバには非常に批判的な風土があつた。市大で闘争、岡本公三の兄、北朝鮮で死亡したといわれているが）がいる。当時、東大安田講堂の闘争で逮捕されていた学生活動家のメンバーが続々と保釈で出でていた。大菩薩峠事件で五〇名以上、その他を入れることにより、多少とも息を吹き返しつつあつた。

### 三 一兵士として始める

森恒夫は、幹部としてではなく、一兵士として始めると言つていた。そして、実際に一兵士として活動を再開し、組織のなかで地道に活動していた。上京してからは、彼とは別の部隊で活動していたので、彼と行動をともにすることはほとんどなかつたが、確か、七〇年の二月か三月だつたかと思うが、何かの形で東大の中に赤軍派が数十名集まつたときのことを覚えている。

何のために集まつたのかは覚えていないのだが、他党派が襲撃していくということで結集したのかもしれない。会議をやつてい

もう一点、七／六事件について補足しておくと、赤軍派は仮議長を置き去りにして逃げ、官憲に引き渡されたという説が言われているが、実際に仮議長を担いで逃げたと証言した人がいる。

負傷した仮議長を官憲に渡さないように何人かで担いで逃げようとしたが、途中で力尽きてやむなく仮議長を置いて逃げざるを得なかつた（仮氏が自分を置いて逃げてくれたと言つたという）と証言した人がいるが、数年前に亡くなつた。結果的には同じかもしれないが、意識的に官憲に引き渡したわけではなく、赤軍派の活動家が何とか守ろうとしたことだけは付言しておきたい。

森恒夫と会つた当時、私はまだ赤軍派に参加することは決めていなかつたが、彼と一緒に東京に行つて活動を再開しようと提案した。彼は何らかのきっかけが必要だつたのだと思うが、その後、何らかの形で田宮と会い、東京で赤軍派として活動を始めることになつたと思う。今でも私は、このとき森恒夫と会わずにいたら後の連赤は起きなかつたかもしれないという思いに駆られる。会

た時だつたと思うが、「??が襲つてきた!!」という声があがり、まだ何の準備もしていなかつたためか、みな浮き足立つて一斉に逃げようとした。その時、森恒夫が一喝して、踏みとどまらせた。後でまちがいだつとわかつたが、その時の森恒夫の沈着・冷静さは水際立つたものがあつた。後に、塩見が逮捕され、よど号HJで田宮が北朝鮮へ、その後高原が逮捕されたあと、事实上指導部不在になつたとき、彼が指導者として中央軍を率いることになる素地はこのへんにもあつたのではないかと思う。

### 四 六九年赤軍派（大菩薩峠等）の敗北の総括をめぐって

赤軍派が考えていた六九年秋の前段階武装蜂起とは具体的には何だつたのか？明確ではなかつたのではないか、というのが率直な感想である。塩見や田宮、上野、八木、花園氏等、指導部のメンバーは必ずしも具体的な計画で一致していたのではなく、それが異なるイメージをもつていたのではないかという気がする。

「デモでもなく、蜂起でもない」というようなイメージがまずあつたのではないか？

一言で言うと、四月デモに対してもレーニンが言つていたような、「証言・連合赤軍」を読むと、塩見氏は、何十人（何百人は無理だろ）かで「武装」して首相官邸に突入する、うまくいけば、首相を捕まえ、大衆団交のようなものを行なう（政治犯等の釈放を要求）というイメージをもつていたという。大菩薩の「軍事訓練」

テロによつて革命をなしうるものではないと。もちろん、中国革命やベトナム・キューバなどのような、ゲリラ戦・革命戦争を経ての革命もある。革命の形態（戦術）は決して固定的なものではない。赤軍派が六九年に掲げた政治路線や戦術をテロリズム・ブランキズムだと小ブル急進主義だと切り捨てるとはたやすい。だが、赤軍派に六〇年代のブンドの最良の部分が結集していたことは事実であり、赤軍派のめざしたものは十分に吟味された政治路線でなく未熟なものだったとしても、そこにはいくつかの光るものがあつた。だからこそ衝撃力が大きかつたと思う。

大菩薩で五〇数名が逮捕されることによつて、赤軍派の前段階武装蜂起という路線は失敗した。前から疑問に思つていたことなのだが、何故大菩薩のような失敗をしたのかわからなかつた。資料を読んでいてようやくわかつたが、私服に尾行されていたことを知つていた者もいたらしい。単なる学習会か訓練だと思つて集まつた学生も多かつたといふ。

まさか、そこに爆弾などが持ち込まれ、投擲訓練などするとは思つても見なかつたものが大勢いた。だから見張り（不審番）を立てることもせずに眠つてしまつたといふ。たとえ警察に踏み込まれたとしてどうということはない。

ところが、爆弾が発見され、爆弾が実験された跡もみつかり、指名手配者もいた。爆弾もなく、指名手配者も交じつていなかつたとしたら、警察が踏み込んできたとしても逮捕などできなかつたに違ひない。何らかの形で罪状をでつちあげ、むりやり何人かをひっぱることができたとしても、爆弾を持ち込んでいることを

を行なつたときには首相官邸を武装制圧するという計画が説明されたという。この時は大衆団交というようなイメージは多分説明されてはいなかつただろうと思う。

臨時革命政府を樹立するというイメージもあつたらしい。田宮から具体的に首班を打診されたという人から聞いたことがある。だが、これもどこまで真剣に考えていたかどうか？

実際、手製爆弾くらいしかもたないかだか數十名の部隊が、警察・機動隊を突破して首相官邸に突入することが可能かどうか、これ自体がもともと疑問だつたのだから、ましてや首相官邸を軍事的に制圧することがその程度の部隊で可能か、という疑問（軍事的な面で考えると到底実現可能とは思えないということくらいはわかつていただろうとは思うが）、ましてや、そこから先のことを考えても仕方ないというのが現実的なことだつたのではないか？

のようない「武装蜂起計画」を実現するために、銃などを集めることを計画し、交番等からの銃奪取を「計画」したが、「これとて、計画といえるかどうか？」大阪戦争、東京戦争という名前だけは勇ましい交番や警察署襲撃などが実際に実行された行動だが、実際は火炎瓶を投げつけて逃げることで終わつた。火炎瓶に驚いた巡査が飛び出してきたら捕まえて銃を奪うということも計画されたらしいが、現場では実行されなかつた。一部、機動隊宿舎に爆弾を投擲したことを若宮氏は後に証言しているが、ちなみに、このような、赤軍派が描いていた計画を実際に行なつたのが革左による上赤塚交番襲撃（七〇年一二月一八日）だつた。

柴野春彦氏が射殺され、二名が重傷を負つて逮捕された。

この事件は赤軍派全体に大きな衝撃を与えたと思う。赤軍派が呼号しながらも実行できなかつた計画を実際に実行しようとしたのだから。その翌年に実行された真岡市塙田銃砲店襲撃（七一年二月一七日）で銃等を奪取したことと同じく一度見直す必要があるのではないかと思つてゐる。というのは、ここから赤軍派では実行できなかつた行動を現実的な行動として実現したことを見たからだ。赤軍派（特に獄中メンバー）は高く評価した。そのことが連赤に影響したからだ。その翌年に実行された真岡市塙田銃砲店襲撃（七一年二月一七日）で銃等を奪取したことと同じく一度見直す必要があるのではないかと思つてゐる。というのは、ここから赤軍派の当初の政治戦略（かなりの点で曖昧模糊であるが）と武装闘争の方向性とが、明確に軍事優先の方向に転換してゆき、最終的に連赤に行き着くからである。ここにつまづきの石があつたのではないか？

資料を見る限り、赤軍派が六九年に本来の意味での武装蜂起を考えていたということはなさそうである。本来の意味での武装蜂起とは、何十万・何百万の大衆の蜂起をさすものであつて、何十人、何百人単位での軍事行動のことではない。パリコミューンやロシア革命のような蜂起を武装蜂起と呼ぶことに疑問を抱く人はいないし、赤軍派もそのような時期だとは考えていなかつた。

マルクスはブランキラの少數の軍事行動による戦術を厳しく批判しているし、レーニンもエスエル（社会革命党）等のテロリズムを批判している。革命は何十万・何百万の大衆の蜂起・行動によって可能であり、少数の集団による軍事行動（クーデター）や

知つてゐながら、見張りもたてず、警察に対する警戒を事実上行なわなかつたことは勿論指導部（指揮官）に責任がある。なんにしても、よく言えば、牧歌的というかおおらかというか、悪く言えば、ずさんというか。

今までの大衆的実力闘争の延長に秋の行動を想定していた（勿論エスカレートさせる形ではあるが）というのが実情ではないかと思う。森恒夫は、後に、自己批判書の中でも、大菩薩について次のように述べている。

「この事で思い出すのは、三島由紀夫がたしか『行動学入門』か何かで大菩薩のことについて、

旧陸軍でも必ず見張りを立てた、とかいう馬鹿なことを言つてゐたが、借りた山荘でそんなことは大して問題にはならない。ただ、権力が来た時の準備、武器を手近に置き、必ず山荘から出て散開して闖うことを意思一致することが問題になる。この意思一致抜きに見張りだけをたてても何の意味もないことだ。」（前記P.二二〇）

大菩薩は「中央軍+地方軍+新しい地区メンバー」であり、経験etc.からみても寄せ集め部隊にすぎなかつたこと（したがつて当然部隊掌握が完全ではなかつた）（二一九頁）と森恒夫は批判している。連合赤軍事件は、ある意味では、森恒夫の大菩薩に対するこのよだな総括から引き起こされた側面があるのでではないかと思う。

大菩薩の全員逮捕の後、赤軍派の関心は技術的な側面に向かつた傾向がある。

まず、大菩薩の時に、見張りを立てなかつたことが批判され、以後、いろんな行動を起こすにあたつては、見張りや警察の動きを調べるということが重視された。（それ自体としては当然なことだが、政治的な面の見直し・総括はおきぎりになつていて。）だが、大菩薩の総括から、今度は別の方向（戦術）が提起されるようになる。大菩薩の後の機関紙で、国際根拠地論が前面に出てくるようになつた。国内だけでは無理だから、カストロがやつたような国外で訓練して乗り込むようなことが必要だと。この論から、ようど号HJと重信房子のパレスチナ行き（後に日本赤軍の活動によつたが）が出てくる。

よど号HJについて言えば、計画そのものは成功して北朝鮮には行けたが、北朝鮮の金日成体制についてろくに調査・評価もしていなかつたつけが九名に回つてくる。本来はキユーバに行きたかったが、飛行機の燃料の関係で無理とわかり、北朝鮮に行くことになつたのだが、そこで具体的にどのような状況になる可能性があるのか、想定なり予想なり厳密にはしていなかつた。本当に北朝鮮で軍事訓練を受け、武器を持つて日本に再上陸できると考えていたとは思えない。それとも、北朝鮮からすぐにキユーバや他の国に行けるとでも思つていたのか？

今から考へると、どう考へてもおかしいとしかいえない。それでも北朝鮮・金日成体制に関して幻想を抱いていたとは思えないが、HJの戦術上からはあそこに行くしかなかつた。先のことはよく考へていなかつたというしかないのではないか？

確かに田宮の場合は、亡命ということも考へていたようである。

M作戦に踏み切つたのはなぜか？勿論、資金がなかつたからといふ理由もある。だが、資金が無いならば、カンパなり、メンバーが働いて稼ぎ出すという方法もあつた。実際、M作戦の前は、ほとんどのメンバーがアルバイトをして資金を稼いでいた。アーバイトで稼いだ金を全額組織に上納していたのである。

M作戦に踏み切つた最大の理由は、革左に刺激されたということが大きかつたのではないか。M作戦（金融機関襲撃）という一種

の軍事行動・実戦によって、本格的な軍を作つていいこうとした面があるのではないか？（当時、建党建軍遊撃戦ということがさかんに言われていた。）結果的に、M作戦は赤軍派・森恒夫を袋小路に追いついてしまつた。

先にいつたように、赤軍派の六九年の路線は矛盾に満ちたアマルガムのようなものであつた。

武装闘争というのは、その中の要素であつて、政治的な路線と切り離して絶対化してはならないものであつた。政治的・組織的に考へると、本当に革命をめざすのであれば、革命党が不可或缺であり、党組織を持ちこたえ、拡大させなければならぬ。大衆運動や特に労働運動とのつながりも絶対必要である。赤軍派は六九年に向けて、基本的に大衆運動から召還するという方針をとつた。六〇年代に築きあげてきた組織的な遺産があつたからこそ、かなりのメンバーを集めることに成功したのだし、大衆運動に対する影響力も皆無になつていただけではない。

これこそ赤軍派の力の源泉だった。

だが、指導部や大衆運動から引き抜いたメンバーのほとんどが逮捕され、田宮ら九名が国外に行つてしまつた中で、組織再建は避けられない課題としてあつた。東大保研組を中心として新たなメンバーも加わつていたとはいえ、このままの路線で行けば、大衆運動との接点が限りなくゼロに近いなかで、新たな補充が枯渇するのには目に見えていた。革命戦線という半公然組織も事実上、大衆運動から召還していた。赤軍派は召還主義によって、組織的にも拡大は望めなくなつていたと思う。基本的に根無し草になつ

塩見と共に国外に亡命し、レーニンのように国外から指導するということも考へていたふしがある。だが、田宮以外では小西が指名手配されていたとしても、その他の若いメンバーは逮捕状など出てはいなかつたのだから、亡命などする必要はなかつた。合法的に国外に出ようとすれば出られない状態ではなかつた。ただ、HJするのに田宮・小西の二人だけでは無理だから、他のメンバーを加えたのか？当初の計画ではもつと多くの人数で計画されていたらしいが、かなりのメンバーが脱落することで計画を練り直したというのが真相らしい。

だから、このHJ闘争としても、国際根拠地論が建設となつてゐるにしても、どこまでが本気だつたかどうかは疑問である。重信房子は合法的に出国してレバノンに行き、他のノンセクトのメンバーも後に合法的に出国して合流したが、こういう方法の方が現実的だつたし、実際に軍事訓練も可能だつたのである。しかも、北朝鮮では結局赤軍派の路線を捨てざるをえなくなり、（表面的にかもしれないが）チュニチエ思想に染められてしまう。路線的に敗北してしまうのである。

この意味で、北朝鮮に行つたことは、結果的に大失敗だつたと言わざるを得ない。こと志と異なる道に進まざるをえなかつたのだから。

## 五　革左の衝撃とM作戦

大菩薩、塩見議長逮捕、よど号HJ等によって、赤軍派は壊滅

ていきつつあつた。

六九一七〇年の安保決戦で玉砕してしまつてもいい、と考えていたメンバーはいるかもしれないが、赤軍派という組織が玉砕して雲散霧消するという路線を組織として考へていたとしたら、そもそも革命組織とはよべない。六九一七〇年の鬭争は、革命へのあくまで一步であつて、決して到達点ではないということも少なうとも指導的なメンバーは分かつていたはずである。

このためには否選主義を克服することが必要であり、ある意味で部隊を温存して一時撤退するという大胆な方向もあったのではないか？そのまま遮二無二突っ走るだけが採りうる路線ではなかつたと思う。又、重信房子が実践したようく、国際的な視野での展開ということもありえた。このように言うと、多分当時の状況では、五〇年代共産党的六全協路線というような批判を浴びていたかもしれないが。（重信房子はM作戦が開始された直後、七一年二月二八日に出国している。この時、森恒夫との論争・対立があつたと言われているが。）

森恒夫はこの時、結局こういう路線は採らず、国内での軍事的な方向を強化するという方針に走つた。これには、獄中からの圧力も大きかつたと思う。赤軍派の当初の路線だつた前段階蜂起なども追求されたが、現実的に不可能、非現実的であるとして、次第に（都市）ゲリラ路線の方向に傾いていく。第二次綱領論争というのがあり、結局のところ、蜂起かゲリラかという論争に行き着いてしまつた。これは政治路線の論争というよりも、狭い意味での戦術論争に終わつてしまつたきらいがある。

ただ、若宮氏が提起していたゲリラ路線・下層プロ論といふのは、赤軍派の従来の路線（中央軍と召還主義）を鋭く批判するものを中心としていた。森恒夫は塩見氏の主張に依拠してゲリラ路線を批判しつつ、中央軍を維持し、軍事行動をおこなうという方針（事实上折衷主義のように思うが）を打ち出す。これが、M作戦といふ形で実行されたのではないかと思う。また、革左との協力から次第に統一という方向に走っていく。

東北隊（植垣・進藤・山崎）を残して、ほとんど全員が逮捕されてしまう。およそ一千万近くの資金を手に入れたとはいえ、ほとんど壊滅に近い打撃を受けてしまう。また、獄中からも手厳しい批判が寄せられた。このことで、森恒夫が追い詰められたことは間違いないと思う。

M作戦に参加したメンバーは、まだ指名手配されていないメンバーが大半だったが、結局坂東隊を除いて全員が指名手配され、逮捕されることになる。結果に比して、あまりにも犠牲が大きかつた。革命の大義も地に落ちた。大衆的な支持基盤もより一層やせ細っていく。

中央軍のメンバーといつても、そこにいる限りただの一兵士にすぎないが、大衆運動に戻れば大きな力を發揮できる貴重な活動家たちを失ってしまうことになった。犠牲ばかりが大きかつたといわざるえない。M作戦などやるべきではなかつたのである。

結果的に、M作戦の「敗北」、部隊の壊滅的打撃によつて、残つた部隊での革左との連合・連合赤軍へと追いやられてしまう。

## 六 草左の二名の「廻刑」をめぐつて

中央軍かM作戦をやらずに健在であつたならば、連赤も起こらなかつたかもしれない。赤軍派と革左とが合流しなかつたら、あの悲劇は起こらなかつた可能性が強いと思う。赤軍派だけの山岳ベースであつたとしたら、あのような事件は多分起こらなかつたと思う。連赤事件は、今から考えると多くの偶然の積み重ねでもあつた。

森恒夫の前のいわゆる第一次赤軍派の組織が大衆運動活動家の組織の延長上の、ある意味でゆるやかな組織であったのに比べると、第二次赤軍派（の中央軍の部分）は、M作戦まで実行できる組織に変貌していったとも言える。といつても、赤軍派はあくまで、自分の意思で自主的に参加する組織であったことにはかわりなく、離脱することはある意味自由でもあった。

強制によつて武装闘争に参加させることができるとは赤軍派の指導部も他のメンバーも思つても見なかつたと思う。（もつとも、大菩薩の時には、事情を十分承知しないまま参加したメンバーも含めて全員遺書を書くようにといわれたと言う。各人に決意を迫つたわけだが、この頃、赤軍派の中ではよく決意主義ということが（どちらといえば批判的な意味合いで）言われていた。連赤はこの決意主義をもつとも極端な形で再現したものという見方もできる。とはいえ、連赤の前には、まだ強制によつて行動をさせるということはできないと多くの人は考えていたようだ。大菩薩のときでも、參

加した中の何人のメンバーが残るか、半分でも残ればいいほうだろうと考えていた幹部もいたという。連赤の中では、これは一変する。自由意志による参加ではなく、命令と強制による組織に代わってしまう。

赤軍派と革左が山岳ベースで共同軍事訓練という名目で合流したとき、革左は赤軍派を自由主義的と批判したという。最初は議長の川島豪を、彼が逮捕された後は永田洋子を最高指導者として担いでいた革左は、かなり家父長主義的な組織であり、その彼らからみれば、赤軍派の雰囲気は非常に自由主義的に映つたのではなかろうか？

絶命の書の、たゞ異なる両者の「合同」が連赤の悲劇の根本にある。山岳ベースからは、「総括」を終わらないうちは下山してはならないという決定（命令）が、あの凄惨な事件の環境を作った。

確かに、自由に離脱を許していたのでは山岳ベースと部隊を維持できないという理由はあつただろうが、自由意志によつて参加している人々を強制によつてとどまらせることが果たして何によつて可能になるのか？暴力による強制しかありえない。だが、これは非常に難しいことである。赤軍派の中央軍にせよ、革左の部隊にせよ、もとより強制によつて参加したメンバーはいない。その主張や理念（イデオロギーといつてもいい）に共鳴し、或いは誰かある人との信頼関係から参加した者もいただろ。武装闘争といひ、武装組織といつても、基本的にはこのような自由意志による参加を基本としている。警察や自衛隊などのような職業的組

織とは異なるのである。

革左は山岳ベースに入る前に二名を殺害している。これは森恒夫の示唆によるというが、森恒夫自身、二人目の殺害の事実を板東から聞いたとき、「え、また殺ったのか。あいつら、もはや革命家じやない」と言つてじつと深刻に考えていたと板東は証言している。

森恒夫の「自己批判書全文 「銃撃戦と肅清」」でも、このことを深く「掘り下げて追求し、連合赤軍の指導部としてより主体的、積極的に旧革命左派の処刑問題に関わり、これを中止させ得なかつたこと、或いはその総括をその後も怠つた事」(一四頁)を自己批判している。これが後の「総括」につながる意味があつたことを認めている。

もつとも、森恒夫はこの殺害事件が世間に明らかになつた時にどのような政治的な反響が起きるか、その意味や重さについては深く考えてはいなかつたようである。

森恒夫が、革左の永田洋子らと会つたときに、組織からの離脱者について悩んでいるということを聞かされ、「殺すべきだ。赤軍派は殺すつもりだ。」と言つたという。実際に森恒夫は、進藤氏の彼女に対する処刑指令を板東に出してはいるが、板東・植垣が処刑という方法を回避して、彼女を逃がしていたので、実行にはいたらなかつた。その件について森恒夫は指令違反として特にとがめるこもしなかつた。後に、山岳ベースでの進藤氏の「総括」理由のひとつにはされるが。

前記の自己批判書によれば、森恒夫は処刑が実行されなかつた

ことを知つて「内心ほつとした」と述懐している。もし、赤軍派内で実際に処刑ということが実行されたとしたら、大きな動揺が起こつていただにちがいない。このような手法は赤軍派の従来の体質とは相容れないものであり、その事実が明らかになれば、おそらく森恒夫自身指導部どころか赤軍派にさえとどまれなかつたにちがいない。

革左が既に二名殺害しているという事実自体、両派が山岳ベースに共同軍訓練という名目で合流した時に、森恒夫の中では大きな心理的圧力としてのしかかつてはまちがいない。

その意味では、森恒夫は二名の殺害という事実を知つたときに、まだ引き返せる機会があつたと思う。革左との合同という路線を白紙に戻すという機会が。

革左による二名の同志殺害が明らかになつたら、革左自身、もはや政治的組織的に維持することは不可能になつてははずである。「裏切り者」だから正当な殺害だと居直れるだろうか?

殺された二人は山岳ベースから離脱したとはい、警察に密告したり切つたわけではないのだから、このような行為が大衆的な支持を得られるわけがない。武装闘争の大義は地に落ちる。革左は、大衆的な糾弾・非難にさらされていだらう。その時点で革左の政治生命は終わつていたに違いない。その意味で、この処刑という行動の政治的な意味を永田や革左の指導部は本当に真剣に考えたのだろうかという疑問がわかざるを得ない。

森恒夫はこのようなことを考えたであろうか?革左との合同、連合赤軍・新党結成という道に進んだとき、そこまで考えていた

だろうか?革左への非難はそのまま、彼らと連合した赤軍派にも向けられることになるということを。第一次赤軍派のときのような集団指導体制であつたなら、このようなことも討議されたはずであり、そなれば必ず政治的な意味が俎上にのぼらざるをえず、批判や反対論が強く出てきたに違いない。森恒夫以外に主要な指導者がいない状態で森恒夫は一人で決断せざるをえなかつた。このことが悲劇の始まりだつたのではないかと私は思う。

※坂口弘の手記「あさま山荘一九七二一上」によると、最初の殺人の犠牲者になつた早岐やすこさんの殺害実行に向かう寺岡恒一が坂口弘に再考を求めたが、坂口は拒否して殺害実行を迫つた、といふ。

寺岡氏が、早岐さんを連れ出したことを報告した後、「視線を少し落とし、「早岐が合法で活動したいと言つてはいるが」と遠慮がちに言つた。瞬間、私は、動揺していると思ひ、強い口調で、「一度決まつたことは覆せない」と言つた。はつと我に返るような表情をして、彼は了解した。(三四二頁)

仲間を殺害すること(殺人を犯すということ)に躊躇がなかつたわけではないにしても、坂口氏は革左の指導部は、離脱者が、例え裏切らなくとも警察に逮捕されたら自供する恐れがあるということで殺すこととしたという。が、こんなことを言えば、ほとんど全員殺されねばならなくなる。ましてや、仲間を殺した人間が逮捕された時、果たして警察の追及にもちこたえられるか、ということを考えなかつたのだろうか? 現にそうなつたのではあるが。

殺害の実行に加わつたメンバーで山岳ベースで加藤能敬氏とともに

最初に「総括」にかけられた小嶋さんも、このときのことがトラウマになつていてることがうかがわれる。結局、連赤崩壊の引き金になつたということがいえるのではなかろうか?

## 七 山岳ベースでの連赤結成と「共産主義化・総括」の過程

赤軍派・森恒夫が革左との組織統一を考えたのは、山岳ベースに行く前からであつたのかどうかは判然としないが、客観的にみればM作戦によつて壊滅的打撃を受けた赤軍派が合同によつて建て直しを図ろうとしたものと思う。革左にとつても、メリットがあつたかもしれないが、獄中の川島議長の反米愛国路線を強く支持し永田指導部に批判的な部分と、川島議長に反発する永田洋子らの間での党内闘争が顕在化しつつあつた。

この革左の党内闘争が「総括」の発端であり、党内闘争を兵士の資質や決意等の精神論にねじまげて行つたことに起因すると私は思う。

一九八三年に刊行された植垣康博「兵士たちの連合赤軍」の本を読んでいて、いわゆる「共産主義化・総括」がどのように進んでいたかが何となく見えてきた(「勝手に思うだけかもしれないが」)。客観的に考えれば、或いは外から見れば、兵士(同志)をどんどん殺していく兵力を減らしていつている。どう考えてみても、これこそ「革命戦争」の遂行の妨げになる、利敵行為ではないかと思われるのだが、誰も(本を読む限りでは)、このことを表立つて指摘したり、批判しようとはしなかつたようである。

(口に出せば、総括の対象にされる恐れでのことだと思うが。) 革左の二名がからうじて逃げ出しただけである。

一月四日、加藤三兄弟の一番下の少年が、兄が死んだ時に、叫んだ言葉が最も鋭く真実をついていたのではないかと思われてならない。

※一

「四日、総括を求められた中でも比較的元気で、総括を成し遂げるかも知れないと思われていた加藤が亡くなつた。全員が驚きを隠せないまま、小屋の中心に繋縛されていた加藤の周りに集まつた。眞面目に総括をしようとしていると評価され、外の立ち木から室内に移された加藤だったが、四日朝、「逃げようとしていただろう」と決め付けられ、再度殴打されていた。それから少しして加藤は亡くなつてしまつた。

メンバーは口々に「さつきまで元気だつたのに」と言った。永

田は「この馬鹿、どうして死ぬのよ」と泣きながら言つた。加藤次兄は、呆然としてその場に凍りついたまま立ち尽くしていた。

また加藤末弟は「こんなことをやつたって、今まで誰も助からなかつたじやないか！」と泣き叫んで、小屋から出て行つてしまつた。

その後、加藤の死は「逃げようとしてばれたことに対するショック死（敗北死）」と決め付けられてしまつた。」

加藤倫教氏の「連合赤軍少年A」（二〇〇三年一二月二〇日刊）を読むと、異常な雰囲気の中でも加藤兄弟は違和感を抱いていたと述べている。

彼は、又、遠山さんへの永田の行動に対しても異常性を感じていた。

遠山さんに総括として自分自身の顔や腹を殴らせ、膨れ上がった顔に鏡をもつていき、「いやがみこんでしまつた遠山に、永田が鏡を見るように命じ、鏡を見ようとしない遠山に鏡を見ることを何度も強いた。

私はこの永田の行動に驚いた。永田が自分の姿勢にコンプレックスを抱いているだらうとは以前から思つていたが、これではまるで白雪姫と魔女の世界ではないか。あるいは絶対的な権力を握つた暴君が、非力な被支配者をいたぶるという國式ではないかと思つたが、永田に疑問を呈してもすべては総括させるためだと言ふに違ひなかつた。

この段階で、永田はすでに明らかにおかしくなり始めていた。しかし、私もその頃には、何が起ころうともはや永田たちに盲目的についていくしかないという、半ば投げやりに近い気持ちに支配されていたのだ。（二五〇頁）

との感じを受ける。

長兄の加藤能敬氏の死は、初めは革左内の明確な党内闘争として始まつたと思われる。七一年の一・二・一八集会（革左と赤軍派の合同政治集会）等に現れた両派の合同の動きに対し、加藤氏と小嶋さんが、獄中の川島豪氏の批判（反米愛国路線の放棄だと合同に反対した）の意見書を山岳ベースに持つていき、批判を行なつた。岩田氏と大槻さん・中村さんも、加藤氏に同調して意見書に署名している。坂口弘はどうやらかというと川嶋派だったので、革左内で永田洋子の方が孤立してしまつた可能性が大きかつた。このように、革左に関しては、党内闘争という側面（川嶋派と永田派との）が大きく、永田洋子は、この批判に直接には触れず、加藤氏の逮捕時の態度など、個人的な点に矛先を捻じ曲げることによつて、彼と小島さんを暴行・死に追いやつて行つたのである。山岳ベースで一番初めに殺された尾崎氏も教対一合法メンバーとして川嶋派に同調していたのが殺害理由ではないかと思う。既に二人（早岐やすこさん——七一／八／四と向山茂徳——七一／八／一〇）殺していたことがその背景にはあり、永田洋子はもはや引き返せないところまで心理的に追い詰められていた。

森恒夫はこれに「共産主義化」「プロ化」「革命兵士化」のための総括という理論づけを行なうことによって正当化した。政治的な側面で見ると、革左の党内闘争で永田洋子を支持・援護する（永田洋子を取り込む）ことで赤軍派に有利な方向にもつていこうとしたのではないかと思う。だがこれは、永田洋子的な手法を拡大・普遍化することで逆に自らの足元をすくうことになつてしまつ。

連赤の中では、なぜ、森恒夫・永田洋子らに反対や反抗ができるなかつたのかということを考えみると、まずははじめに加藤能敬氏が党内論争を始めた際に暴力的に虐殺されてしまつたという事実があつたこと（反対できない威圧感）と、後には被害者になる者が加害者として強制されたことが心理的要因として働いたことが大きかつたのではないだろうか？一緒になつて暴行なり殺人なりしなければ自分がやられてしまうという恐怖感から例外なく暴行・殺人に加わつた。

集団的狂気に染められていつた。これによつて共犯意識ももたらされたに違ひない。

この過程を見ると、スターリンの血の肅清を思い起こしてしまふ。そしてこの過程で、森恒夫と永田洋子が独裁的になり、神聖不可侵となつていつた。誰一人、森、永田だけは批判の対象にすることはできなくなつた。森恒夫（と永田洋子）は小スターリンになつた。

森恒夫、永田洋子が逮捕されるまでこのプロセスはおそらく際限なく続いたに違ひない。実際、森・永田が逮捕された後になつても、総括・総括という強迫観念は続いていたようである。

あさま山荘の銃撃戦のさなかでさえ、そのような言葉がまだ飛び出していた。さすがにその馬鹿馬鹿しさに気づいたようだが、思うに、この異常さを森恒夫や永田洋子は維持し続ける必要があつたのではないか？なぜなら、このいわゆる「共産主義化・総括」は、一種の強迫観念として集団を支配していたので、その

観念が停止した時は、正常な神経が復活する時であり、その時にはおそらく森恒夫と永田洋子の支配自体崩れざるをえないと思われるからである。森恒夫は絶えず、「総括」という狂気を強いて、普通の感情や神経を麻痺させることによって支配を維持し続けようとしたのではないだろうか？（森恒夫本人がそのことを意識していたかどうかは別の問題であるが、後の自己批判書では、彼自身も「狂氣」と言っている。）

誰かが、このような異常な状態に目が覚めたら、もはや組織自体が崩壊するか、森恒夫・永田洋子が逆に殺されるかということになつて、可能性はなかつただろうか？

森恒夫は、もはや周りのことは何も目に入らなくなり、権力との武装闘争（そのための共同軍事訓練）という当初の目的自体がどこか遠くに飛んでしまつてはいたのではないか？

闘争を担うはずの多くの同志（その中には経験豊かな兵士もいた）を殺してしまい、兵力は激減していただから。あのようななさいなこじつけやあげ足取りをされたら、ほとんどの人間が生き残れなかつたに違いない。植垣氏の本でも森恒夫と永田洋子が出て行つた後、警察の追跡・包囲網が狭められてきている中で、獵師と遭遇したりしたため、今度獵師と遭遇した時の対応を話し合つたときのひとコマが出ていている。

獵師に対して総括を要求してオルグするというような話が出たが、さらに、「日本人をひとりひとり捕まえてきて総括を要求すれば革命ができてしまうんじゃないのか？」、「もしもそうなら日本人の半分は総括できずに敗北死してしまうんじゃないのか？」など

どといった疑問が出てきた。私たちは、この疑問を冗談のようにい合い、笑つてしまつたが、この疑問や笑いは暴力的総括の要求のおかしさを示すものであつた」と植垣氏は記している。（三三三頁）

この話はボルボト派による大量虐殺を思い起こさせるが、それはともかくとして、この「共産主義化・総括路線」の下ではまだ多くの仲間が殺されていつていただろうと思わざるをえない。

だが、森恒夫・永田洋子が出かけて行つた後、二名が隙をみて逃げ出した。

（山本康子さんは夫を殺され、子供をおいたまま脱出（七二／二／六）。前沢氏は翌日二／七に「逃亡」した。その前に、既に、一／一九には、名古屋に中京安保共闘をオルグに二人で行つたうちの一人である岩田氏が逃亡している。このため機密の山岳ベースは危うくなり、移動せざるをえなくなつた。このあと起つたことは末期症状としか言いようがない。既に「共産主義化・総括」という集団的呪縛が解け始めていたのではないかと思われ、そのためにはさらに追い詰められた心理となり、過酷な処刑などの行為に走ることになつたようと思われる。

この少し前には寺岡氏の処刑（一／一八）が行なわれているが、

「連合赤軍少年A」によれば、永田洋子が、「皆、一緒の立場になつた。捕まれば死刑よ」と言つたという。（一五八頁）

恐怖を共有することによってしか集団を維持できない心理情況

を物語るものではないか？

## 八 森恒夫の役割と責任について

連赤のことを考えるとき、森恒夫の果たした役割をどう捉えるかということを重要だということについては誰も疑義ははさまないだろう。しかし、塩見氏のように、連赤の路線は正しかつたが、森・永田が悪かつたというような批判は疑問である。

最近も塩見氏は、連赤事件に対して、以下のような発言を行なつてゐる。

二〇〇八年（三月二二日、阿佐ヶ谷ロフト報告、全共闘世代vs自分探しの世代）この世を悪くしたのはお前だ】に答える】から「あそこに理想主義などかけらもありません。あれは、スターリン主義を容認する毛沢東思想賛歌、盲従を名分とする、永田さん、森君二人の日和見主義者の、間違つた判断による「野合新党」でつち上げに伴う、それに反対する人々の肅清です。

「共産主義化」「総括」は、そのための下部同志支配の手段であり、カムフラージュでしかありません。

それを、「理想主義」などと、混同させるのはチャンチャラおかしいのです。

赤軍派の理想主義の流れは、その二ヶ月後、実現された国際主義精神に溢れたリッダ闘争に貫徹されます。

今こそ、理由なく殺されて行つた一二名は、正しく復讐されるべきなのです。

銃撃戦は、この過ちから解放された、贖罪心をばねとする五名

の戦士達によって実現された、日本初の真っ向から日本国家権力と戦つた銃によつて武装された民衆の闘いでした。しかし、これは断じて支持されは、ならない戦いです。

同志殺しなどせずとも、日本民衆は、奥平、安田、岡本同志のように戦えるのです。」

この発言にも現れている塩見氏の発言は、連赤事件について本当の意味では「総括」できていないのではないかと思わざるえない。

確かに、もし連赤の指導部が森でなく、例えば、塩見や上野とか花園、田宮など他の人間であったならどうであつたか、ということを考えたとき、もしかしたらあのようないきは起きていなかつたかもしれない歴史に、もしも、ということは許されないが、それでも事態は別の展開になつていた可能性は大きいと思う。だが、同じような悲劇が起こらなかつたとも断言はできないだろう。

若宮正則氏が言つていたように、「大衆の政治、思想、運動、組織等々の外部に、それとは無関係な形で組織された革命軍は、半年か一年後に必ず自己崩壊していきます。連赤もそのような形で組織された革命軍だったので、組織されると同時に自己崩壊しきれども崩壊の一つの現象としてリンチ事件を引き起こしてしまつたのです。」（一〇八頁）という指摘は、少なくとも塩見氏の主張よりもはるかに近いのではないかと思う。路線の誤りを総括することなしに、森・永田の責任だけあげつらることは、本当の意味での総括とはならないと思う。

※「釜ヶ崎赤軍兵士 若宮正則物語」(高畠真公) 二〇〇一年一月三一日刊) の中で、若宮氏の塙見氏に対する批判が載っている。(二〇八~一〇九頁)

少々長いが引用する。

「路線的に連赤は誤つていなかつたのだ。にもかかわらず連赤が敗北したのは、指導部に欠陥があつたからだ。つまり、森恒夫氏や永田洋子氏のような孔孟主義者が指導したから敗北したのだ。だから今度は塙見のようなマルクス・レーニン主義者を指導者に選んでもう一度連赤路線でやつてみよう」というのがプロ革命派の主張だった。このような主張は、僕に言わせれば、連赤も統括、居直りであり、犯罪だよ。

彼らはなぜ連赤リンチ事件が発生したのか全然分かつていないのだ。リンチ事件は連赤の路線が生み出したものであつて、連赤指導部(特に森、永田両氏)の小ブル反動化がリンチ事件の根本的な原因などでは毛頭ないのです。リンチ事件の原因を、森、永田両氏の反動化に求めることは、それこそ反動的なことです。」

若宮の批判の焦点は、大衆召還路線の軍建設であつた。

「革命の政治、思想、運動、組織等々は大衆の(もちろんプロレタリア大衆のことだ)政治、思想、運動、組織等々としてしか存在していないので、大衆の外部に革命組織を建設していくとしても、それは絶対的に不可能だからです。大衆の政治、思想、運動、組織等々の外部に、それとは無関係な形で組織された革命軍は、半年か一年後に必ず自己崩壊していきます。連赤もそのような形で組織された革命軍だったので、組織されると同時に自己崩壊し、

これだけでも連赤は、「三大規律・八項注意」から大きく逸脱している。どんな難しい理論や理屈よりもこのよう簡単なこと、基本的なことを実行していれば、あのような陰惨な事件は起きなかつたのではないか?と考へるのは単純すぎるだろうか?

M作戦も三大規律の二に反する行為である。銀行だから許されるとか、レーニンも容認したとかいうようなことは屁理屈であると思う。

歴史上、どの軍隊でも、規律の維持ということは非常に重要であつた。中国紅軍・人民解放軍の経験は、あの当時もよく知られていたことであり、そのようなものへのあこがれが、特に中国派の革左に参加したメンバーにも流れているようだ。にもかかわらず、革左も、中国革命通である森恒夫も「三大規律・八項注意」にふれながら、その内容には言及しようとしている。不思議なことではある。連赤は、作風を重視するといい、共産主義化といい、プロレタリア化と言いつながら、このような簡単な基本的なことを実行しなかつた。もし、「三大規律・八項注意」が連赤の中で徹底していたとしたら、「総括」というような暴力行為が「同志的援助」という名の下に行なわれるようなこともなかつただろう、というのはこじつけだらうか?

ひるがえつていうならば、内ゲバを繰り返してきた新左翼の体质をそのまま引きずり、エスカレートさせてしまつたのが、連赤のリンチ殺人ではなかつたか?勿論、中国革命の歴史的条件の中で形成されてきた「三大規律・八項注意」を、日本に機械的に当てはめることは必ずしも正しいとはいえないと言われるかもし

自己崩壊の一つの現象としてリンチ事件を引き起こしてしまつたのです。」

若宮は、獄中で、赤軍派の総括から、中央軍の路線を批判して

都市ゲリラ路線を主張したが、七二年二月の「査証」に発表された論文「遊撃戦のスタイル」で上記の主旨と同様な内容で、連赤の事件を予見するような主張を展開していた。(七〇年~七一年、

連赤のリンチ事件が発覚する大分前に執筆してたと思われる)。

若宮氏は、この主張を釜ヶ崎で実際に自分で実践したという点で、頗まれな革命家だつたと思う。

彼は後にアナリストを宣言し、ペルーに渡つてセンデロルミニソに殺されてしまう。(九〇年一月一四日)

今改めて読み返してみて、既に連赤の事件を予見するような彼の主張は、全部が正しいとはいえないにしても、鋭く核心をついていたとおもわざるをえない。

## 九 連赤の「規律」と「三大規律・八項注意」

森恒夫は大阪市大のブンドでもどちらかといえば、中国派といわれていた。毛沢東主義はソ連スターリン主義とは異なるものとして、高く評価していた(あくまで関西ブンドの理論の枠内での評価であるが)。中国共産党の革命戦争の歴史にも詳しかった。前述の自己批判書でも、中国革命のことが随所に出てくる。当時、赤軍派や革命戦線の中でも、中国革命についての本や「星火燎原」

など抗日戦争の兵士の記録などがよく読まれていた。  
自己批判書の中で、森恒夫は中國紅軍の「三大規律・八項注意」についても言及している。  
残念に思うのは、彼はここに何が書かれているかを実際に口に出して言うべきだったということである。

以下に「三大規律・八項注意」を記す。

〔三大規律〕

- 一、一切の行動は指揮に従う
  - 二、大衆のものは針一本、糸一筋も盗まない
  - 三、一切の捕獲品は公のものとする
- 〔八項注意〕
- 一、ことば使いは穏やかに
  - 二、売り買いは公正に
  - 三、借りたものは返す
  - 四、壊した物は弁償する
  - 五、人を殴つたり罵つたりしない
  - 六、作物を荒らさない
  - 七、女性をからかわない
  - 八、捕虜を虐待しない

きわめて当たり前のことを言つてゐるようと思えるが、せめてこのことを忠実に実行していれば、連赤の事件は起らなかつたのではないかと思われてならない。「総括」という行為は、五の、人を殴つたり罵つたりしない、という注意に反する行為である。

れないが、せめて革命をめざす組織であれば、この程度の規律、倫理は実践すべきではなかろうかと私は思う。

※査問というのがある。新左翼が日本共産党時代からひきずつてきたもので、今も各党派に残っているのではないかと思う。連赤の「総括」は、この査問のいきついた形態ではなかつたかと思う。五〇年代の日共の非合法闘争の時にも、連赤に似たような事件が発生している。

山村工作隊・中核自衛隊とよばれた武装組織の中、査問が行なわれ死者も出ている。

日共から飛び出してブンドが結成された時、ブンドもまた日共時代の体質を、無自覚であれ、かなりの程度そのまま引き継いできた。そのひとつが査問委員会という形式の党内「裁判」である。

### 九 リッダ闘争と日本赤軍

連赤とは対極的な姿勢を貫いた軍事組織として、日本赤軍がある。

ラブにいた重信たちの怒りと悲しみは大きかつた。奥平は号泣し、一晩中、手元にあつた中国革命に関する本の一文を涙を流しながら読み続けた。

「隊伍を整えなさい。隊伍とは仲間のことです。仲間でない隊伍がうまく行くはずがないじやありませんか——」（婦人公論　二〇〇七／一二／一二　一／七合併号一七七頁）

七二年五月のリッダ空港闘争は、パレスチナ解放闘争に志願した日本人義勇兵（PFLPコマンド）による作戦であるが、同時に、連合赤軍の血の肅清を身をもつて否定した行動でもあつたと思う。彼らは、「赤軍派よりも赤軍派らしい」と言つたら語弊があるかもしれないが）戦いの方を自らの行動をもつて示した。（後に重信ら日本赤軍は、観光客を銃撃戦に巻き込んで多くの死傷者を出したことに對し、自己批判し、謝罪している。）

日本赤軍の軌跡をたどっていくと、連赤とはまったく異なつたやり方で同志的な絆を保持していたことがわかる。環境が違うと言つてしまえばそれまでかもしれないが、森恒夫と重信房子（だけではなく、特に奥平剛士）の個性の違いが、ここにこのような形であらわれていることは否定しようがない。

それにしても思う。

森恒夫に重信房子のような、おおらかさ、しなやかさ、したたかさがあつたら。一本の鋼線がビンとのびきつて耐え切れずにつれてしまつようになつた。車の運転でもいわることだが、ハンドルには遊びが必要だと。遊びのない、ギチ

ギチのハンドルでは運転できないのである。人間は、ギリギリの緊張感を何日も何年もそのまま持続させることはできない。緊張をほぐすことや休息を取り、疲れを癒すことが必要である。連赤は、この自然な欲求を無理やり押さえつけようとした。そして破綻した。

わかりやすく言うと、連赤とはそういうことではなかつたかとつくづく思う。

島崎今日子さんのルポには、重信が七〇年代の早い時期に北朝鮮の田宮らと接触を図つたことが載つていて。重信が田宮らよど号メンバーに対して、批判と失望を抱いたことが素直に記されている。

「私のような感性の持ち主は、髪型が刈り上げとかおかっぱとか、画一的なのはあんまり……」

当初はスターリニストに抑圧されていると考えていましたが、彼らの意思で主体思想万歳！になつていてのがわかつて、びっくりしたけれど」（二三八頁）

重信たち日本赤軍は、「國家権力の傘の下には入らない、スペイ活動はしない。本拠地は世界のゲリラ兵士が集まるレバノン北部のベカ一高原にあつたが、各地にシェルターを持ち、各国に便宜を図つてもらわねば出国も生活もできない立場にありながら、日本赤軍は小さくとも自主独立を貫く」ということを貫いた。

「某国のトップにその国益のためにあることを頼まれたとき、後ろからズドンとやられるかなと思ひながらもノーと言つて席を立つたこともありました。原則を曲げて生き残る必要なし、です

七年、日本赤軍がクアラルンプールの日本大使館占拠・同志奪還闘争で超法規措置で出国した板東国男が、日本赤軍に合流し、初めて重信房子と話した時のこと、

「どうしても最初に言わなければならぬことがあります。私は同志肅清という重大な誤りをおかしたのにどうして奪還してくれたのでしょうか？私は同志達によつて処刑されることはも覚悟していました。人が直接私達を裁けない以上、あなた達で査問委員会を開いて下さい。それなしに話す資格は私にはありません。」

その言葉に重信は、「私達は査問委員会などやるつもりも資格もないんです。連赤の敗北を日本階級闘争を闘うものの総体としての敗北として受けとめ、共にその敗北の責任を共有し、総括をかちとつていくために奪還したのです」と答えている。確かに昔に読んだ記憶があるような気がするが、今改めて読んでみて、特に連赤関係の資料を読んでいる時にこの言葉に出会つて、胸のつかえが取れる気がした。涙が出てとまらなかつた。

最近、婦人公論に連載されている島崎今日子さんのルボルタージュ「時代を創る女たち 重信房子 この空を飛べたら」を読んだ。

アラブに行つた重信や奥平たちにとつても連赤事件のショックは大きく、親しかつた遠山さんたちの死は大きな衝撃だつた。

その時のことを島崎今日子のルボは次のように書いている。

「連合赤軍事件の陰惨さに日本中が顔を背けた。これにより過激派を支持していた層は一転して沈黙、全共闘世代に深いトラウマを与え、以降今に至るまで左翼は沈下する。無論、あの時、ア

から」（二三八頁）

余談ではないが、現在、重信房子は二〇年の実刑判決を受け、控訴審を戦っている。

島崎今日子のルポを読むと、湾岸戦争の時、イラクで人質になつた日本人の解放の実質的な交渉をフセインと行なつたこと（日本政府はその結果をもらつただけではないか）、イスラエルのレバノン侵攻時に、日本赤軍が日本人を守つて避難させたことなどが触れられている。重信を初めとする日本赤軍は、リッダ闘争だけではなく、医療支援・難民支援等々、軍事だけでなく、パレスチナの解放運動に大きな貢献を行なうことで、パレスチナ人や中東の人々への熱い共感・支持を得ている。それが大きな意味での日本（人）への好意として、その意味で大きな「国益」をもたらしている。

日本外交の「無策」を補つてあまりある「国際貢献」を重信たちは行なつていて、アメリカ・ブッシュ政権のために行なつて自衛隊のイラク派兵——今も航空自衛隊と海上自衛隊が参戦している——は、このような成果を台無しにして、アラブの人々からの反感を買つている。つい最近、違憲判決さえ出している。日本政府はこのことをよく考へるべきである。

政治的報復という色彩が強い、重信や日本赤軍への無期・重刑攻撃を撤回すべきである。法的にみても二〇年以上も前の事件で

あり、時効が成立する。スペイン内戦に参加した国際義勇兵に対する、二〇年後に裁判にかけるということと同じではないだろうか？ 重信らへの重刑攻撃をはねのけて、彼女が一日も早く出獄することを祈りたい。

重信以外の日本赤軍のメンバーの多くが無期刑などの重刑を科されている。丸岡修氏は無期刑が確定し服役中（心臓病で面会料は車椅子のこと）、西川純氏は無期の求刑で控訴審を闘っている。元赤軍派中央軍の城崎勉氏もネバールでアメリカに拉致され、アメリカで裁判にかけられて五〇年の有期刑を受けている。彼らへの支援を強化する必要があると思う。

#### あとがきにかえて

塙野七生の『ローマ人の物語』に次のようなくだりがある。「政治とは、小林秀雄によれば、『ある職業でもなくある技術でもなく、高度な緊張を要する生活』であるという。消化器系が弱く生まれなくとも、弱くなるほどのストレスの連続なのだ。この状態を生き抜くのに必要な資質は、第一に、自らの能力の限界を知ることもふくめて、見たいと欲しない現実までも見すえる冷徹な認識力であり、第二には、一日一日の労苦のつみ重ねこそ成功の最大要因と信じてその労をいとわない持続力であり、第三は、適度の楽観性であり、第四は、いかなることでも極端にとらえないバランス感覚であると思う。」（VI、二八二頁）

森恒夫と重信房子の差は、政治家としてみればこのへんにあつ

たのかなという気がする。

ただ、森恒夫が逆にアラブに行つていればどうなつていたのか、ということをふと思つたりもする。重信とは異なるにしても、少なくとも連赤とはまったく違つた展開があつたのではないか、と思う。歴史にもしもは許されないとしても、そういう観点から見ることも必要なのではないか。

とりとめなく書き散らしてしまつたが、連赤事件から三〇数年の歳月が流れた。連赤で死んでいた人たちの三倍近い歳月を我々の世代は生きてきた。連赤は、広島・長崎やアウシュビツツの記憶を風化させてはならないのと同じ意味で風化させてはならないという思いでとにかく書いた。

事実が異なるとか解釈が誤つていてるという批判や反論もあると思いますが、議論の一助になればと思つています。

一九九〇八年四月三〇日

## 知の根源を抉る

### 世界書院の本

メルロー・ポンティとマルティネ

G・シャロン著／菊川忠夫訳／A5判／3900円＋税

ルソーとヴォルテール

井上堯裕著／A5判／4200円＋税

デリダの思想圏

小林浩著／四六判／3600円＋税

フランクフルト学派の論理

速川治郎著／B400円＋税

フーコーの世界

田村眞著／2600円＋税  
箱石匡行著／3500円＋税

近代〈知〉とメルロー・ポンティ

清水誠著／現象学叢書第一〇巻／25000円＋税

メルロー・ポンティと言語

加賀野井秀一著／現象学叢書第一五巻／2500円＋税

東京都千代田区西神田3丁目1番2号ウインド西神田ビル502号 Tel.03-5213-3238 Fax.03-5213-3239